



映画に
宛てた
ラブ
レター

2014・6月号

天見谷行人

世界の果ての通学路

世界の果ての通学路

2014年5月11日鑑賞

「いってらっしゃい、ゾウに気をつけて」

世界には、子供が学校に出かける時「ゾウに気をつけるんだぞ」と送り出す地域がある。日本なら、子供が学校に出かける時「クルマに気をつけてね」と声をかけるだろう。しかし「無事に我が子が学校につきますように」と神に祈る地域があるのだ。世界って本当に広いのだなあ〜、この作品を観てつくづく思う。

本作で取り上げるのは、四つの国の子供たち。その通学の様子だけに集点をしばったドキュメンタリー映画である。



飢えや貧しさ、と言うものは他の映画でもよくモチーフとして扱われるテーマだ。しかし、本作はもっと狭い範囲に注目した。

「その国では、子供はどのように学校に通っているのか？」その部分だけに注目する事によって、子供たちの置かれている現状、国の様子、自然環境、生活と文化、宗教にいたるまで、切り込んで行こうと言う意欲作だ。

作品を見て思うのは、監督の演出が入っている事がすぐ分かる事だ。

たとえばケニアのジャクソン君の場合では、妹と一緒に片道15km、2時間の道のりを歩く。途中、危険なゾウやキリンの群れをさけながら行く。撮影班は彼らを先回りして、茂みに隠れる兄妹

を前方からのカメラで捉えている。こういうショットを”やらせ”と捉えるかどうかは観客である僕たちの、それぞれの反応にまかされる事だ。

それより想いを馳せるのは、この少年達の「学びたい」と言うひたむきな姿である。



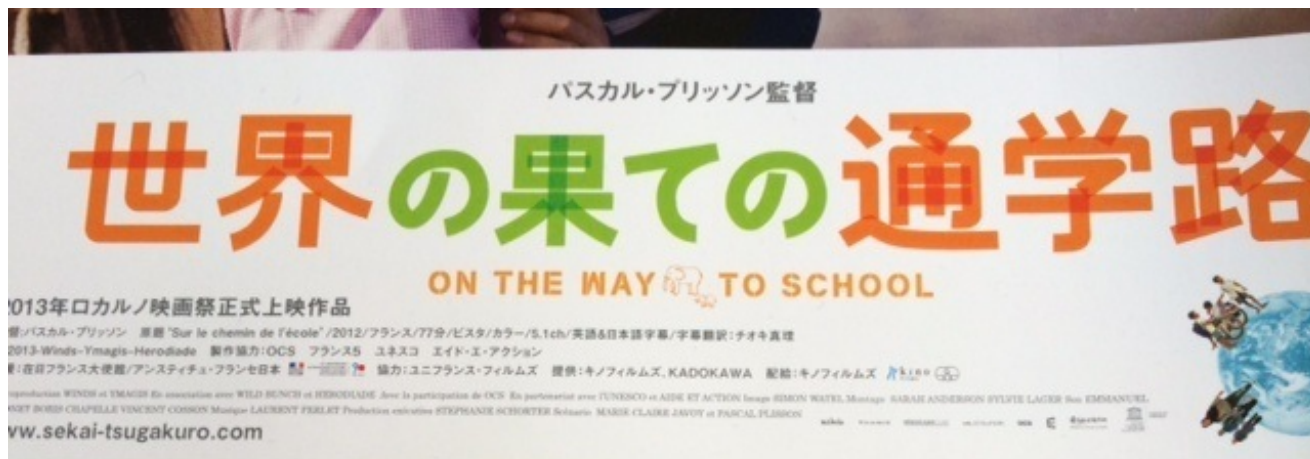
ジャクソン君は毎日の水を確保するために地面を掘り、泥水をかき出して暮らしに使っている。その泥の混じった水を小さなポリタンクに入れて、学校まで水筒代わりに使う。

モロッコの少女達は、険しい山道で足を痛めながら22km離れた学校に通っている。アルゼンチンの兄妹は、馬にのり、崩れ落ちそうな斜面を巧みな手綱捌きで乗り切り、学校へ通う。

この作品で登場する子供たちは確かに過酷な環境で生きている。

まかり間違えば、通学途中で命を落とす危険さえある。

それでも彼らは学校へ通う。



彼らには夢がある。だから勉強したい。勉強したいから学校に通う。
 ケニアのジャクソン君の夢はパイロットになる事だ。もし彼が本当に将来パイロットになったら
 どうなるだろう。この映画を観ているこちらまでわくわくする。自分の生まれ育った、ゾウやキ
 リンがのし歩く、ケニアのサバンナ。その大空を飛べたらなんと素敵な事だろう。
 子供たちの学びたいと言う気持ちを受け止め、育てるのは大人の仕事である。教育と言うのは費
 用対効果が最も分かりにくい。しかも、結果や成果というものが認められるのに、少なくとも十
 年以上かかる。

少年達の夢に大人達はどうか答えてゆくのか？ ケニアの空にジャクソン君が飛ぶ日が来るのを、
 大人の一人として夢見たい。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

- 物語 ☆☆☆☆
- 配役 ☆☆☆☆☆
- 演出 ☆☆☆
- 美術 ☆
- 音楽 ☆☆☆
- 総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 パスカル・ブリッソン

主演 四つの国の子供たち
製作 2012年 フランス
上映時間 77分
予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=8hL3am8Mpk>

ブルージャスミン

ブルージャスミン

2014年5月18日鑑賞

巨匠の風格はどこに消えたのか？

おそらく、この数年、ウディ・アレン監督が作ってきた作品のなかで、最もつまらない作品である事は間違いないでしょう。

2011年の「ミッドナイト・イン・パリ」2012年の「ローマでアモーレ」両作品とも「映画を見る楽しみ」と言うものがありました。そこには「あの大スターが、こんな意外な人物を演じるの？」という楽しみ。それにパリやローマといったロケーションの魅力「映画を撮りやすい」舞台設定、がありました。なにより、多少ドタバタ調ではありますが、脚本が面白かった。



さて、本作でも、ケイト・ブランシェットやアレック・ボールドウィンと言ったスターさん達が登場します。ただ、舞台設定はサンフランシスコのダウンタウン。正直それほど見栄えのするロケーションではない訳です。最も大事な脚本が「これ、本当にウディ・アレンが書いたのかなあ〜」と言うほど、陳腐で捻りが効いてない内容です。

ケイト・ブランシェット演じる、セレブな奥様、ジャスミン。

だけど本来、教養も無く、パソコンひとつ扱えない。もちろんダンナが限りなくブラックに近い仕事をしている事などご存じない。

そんで.....

ダンナは逮捕。財産没収。

一夜にして彼女はセレブから一文無し、どころか、莫大な借金まで背負います。

ちなみに、どれだけの借金を背負っているのか？ どういういきさつで借金を背負う事になったのか？ 何の説明もありません。

だから、ケイト・ブランシェットが、そのアカデミー賞を受賞した演技テクニックで「うまく観客をだましおおせても」実は何のリアリティーも無いのです。

さて、ジャスミンはサンフランシスコのダウンタウンに住む、妹のもとに身を寄せます。もとより、「にわか仕込み」の「成り上がりセレブ」ですから、お金の上手な使い方、生かし方、なにより「お金との付き合い方」そのものが分からない。だから、借金を背負っているのに、飛行機は贅沢なファーストクラスを使って妹の元にやって来る訳です。

彼女は元セレブの生活が忘れられない。時給いくらと言うような仕事に就く事も苦痛でしょうがない。そのストレスで感情は不安定。抗うつ剤をがぶ飲みしながら、妹との暮らしを始めます。

そんな時、あるパーティーで彼女は一人の独身男性と出会います。

彼は内務省勤務。豪邸を所有し、もうすぐモナコ行きも決まっている。憧れのセレブ生活が復活するかも。ジャスミンはこの男に急速に接近するのですが.....。

アカデミー賞®
主演女優賞 (ブランシェット) 受賞
ゴールデングローブ賞 (ドラマ部門)
全米映画批評家協会賞 / 全米映画俳優組合賞
英国アカデミー賞は多数!

人生のどん底に墮ちた、
ブルーすなわち憂鬱なジャスミン。
再び夢のようなセレブリティ生活に
返り咲くことができるのだろうか?

ウディ・アレン創造の新たな主人
「ジャスミン」がオスカーを獲得し、
映画史に輝く伝説のヒロインに名

「名前を変えたの、ジャスミンに。
ジャネットなんて平凡なもの。」

まあ、最近のアカデミー賞の権威の無さと言うか、くだらなさ、この作品でケイト・ブランシェットがオスカーを獲った、と言う事に象徴されているかのようです。彼女の演技力からすれば、この水準の演技はいつでもやっている訳です。とりたてて「すごいなあ〜」と感嘆する部分など、僕の見限りではどこにも見当たりません。

むしろ、彼女がかつて演じた「エリザベス・ゴールデン・エイジ」なんかの方がよほど凄みがあ

りました。作品そのものの凄みと言う点では、ウディアレン近年の作品、2005年の「マッチポイント」の緊迫感溢れる脚本は本当に凄かった。作品としての完成度も桁違いに「凄い」の一言。巨匠の風格にふさわしいものでした。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆

総合評価 ☆☆☆

作品データ

監督 ウディ・アレン

主演 ケイト・ブランシェット、アレック・ボールドウィン

製作 2013年 アメリカ

上映時間 98分

予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=i9c-lmW-FYc>

チョコレートドーナツ

チョコレートドーナツ

2014年5月29日鑑賞

解き放て、命の美しさを

この作品は2014年、最も美しい人間達のドラマだ。

その美しさは「アナと雪の女王」よりも輝いている、とさえ僕は思う。

何が美しいのか？

人間の心である。

作品の精神である。

この作品を形作る全ての要素が美しいのだ。



これは、ある男性二人が、ダウン症の少年をひきとり、育てる話だ。

ただ、この男性二人は世間の偏見にさらされている。

二人はホモ・セクシュアリティである。

時代は1979年、今よりも、よほど同性愛について偏見のきつい時代の話だ。

二人の元に身を寄せる少年マルコ。

彼の父親について、この映画ではよく語られていない。また、その必要も無いだろう。マルコの育ってきた環境は、一見するだけで劣悪極まりない場所だと分かる。母親は麻薬中毒、いわゆるジャンキーである。薬を射ち、ラリって男を連れ込んでいる。その間、マルコに居場所は無い

。部屋の外で事が済むまで待つしか無いのだ。母親は恐ろしい音量でガンガン、ロックを掛けまくる。騒音、爆音の洪水の中で彼女はSEXに溺れる。

隣の部屋に住むのが、ゲイバーでダンサーをやっているルディ。「工作中」はセクシーな衣装で女装し、派手な化粧もしている。

ステージに立つ彼は、店にやってきたある男性に一目惚れする。男性はお固い法律事務所に勤める、エリート社員ポールである。二人はやがて「男と男」の恋愛関係に陥る。

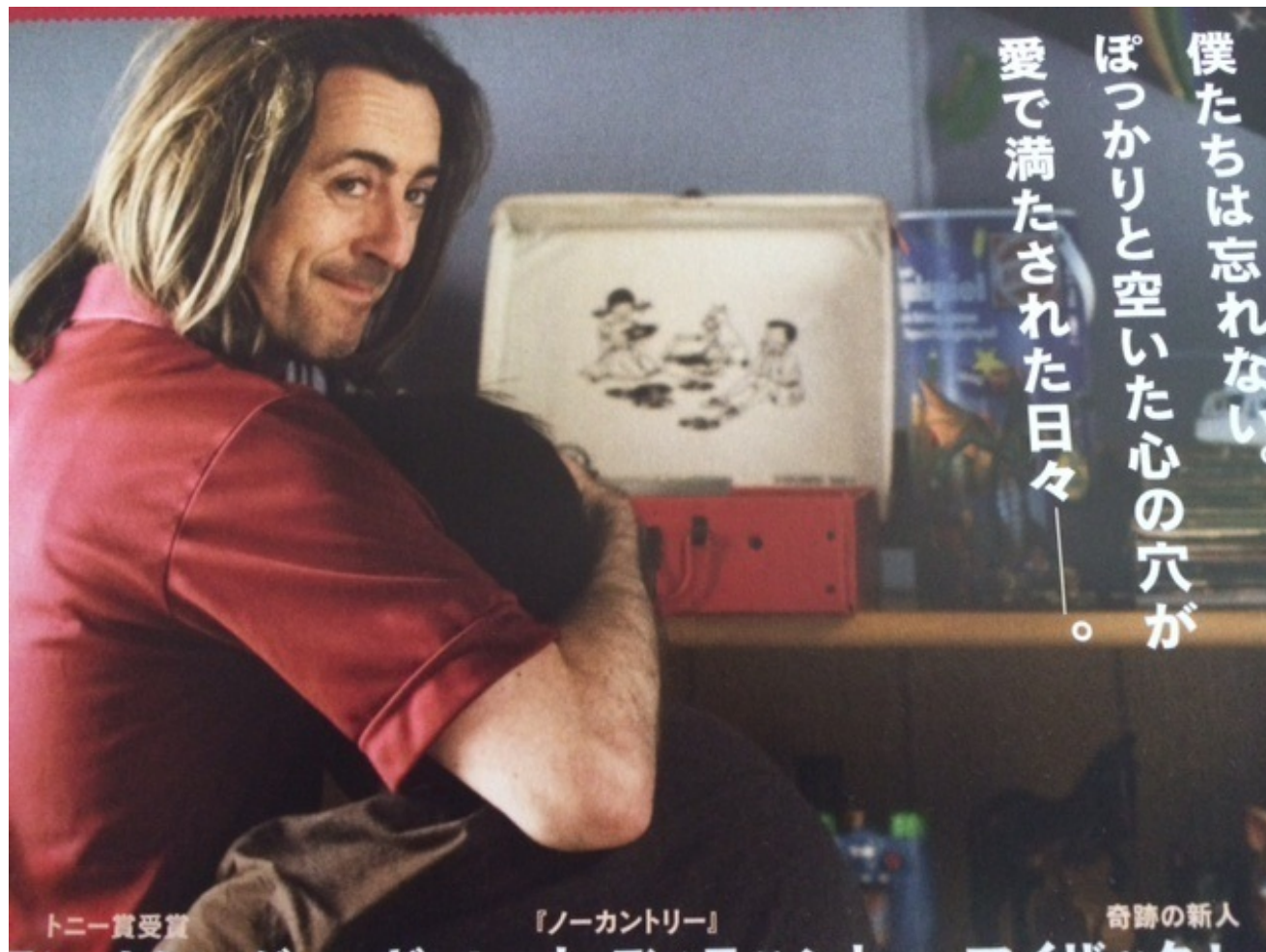
さて、ルディは隣の部屋からの騒音に堪えかね、怒鳴り込む。その顔は、化粧を落とし、無精髭が見える。どこからみたって、むさ苦しいおっさんである。爆音が鳴り響く部屋で彼が見たのは、耳を抑えておびえたように部屋の片隅ですくんでいる小太りの少年、マルコだった。

その後母親は、麻薬所持で逮捕。ある日、ルディは夜の街を彷徨っているマルコを見つける。

「この子をほうっておけない」

ルディとポールは二人で、ダウン症の少年、マルコを育てようとする。

マルコが二人の部屋に保護された時のシーン。



「ここ、ぼくのおうち？」

「そうだよ。これから僕たちは家族だよ」

体をふるわせて、喜びの涙を流すマルコ。

このシーン、マルコとルディの背中ごしのショットである。

正面からマルコの喜びや悲しみや安堵の表情は撮らない。

あくまで、マルコの震える背中、それだけで、彼の育ってきた環境、苦しみ、悲しみ、救い、喜び、全てを表現しきっている。

この監督の手腕の素晴らしさ、表現の的確さに、僕は賞賛の拍手を惜しまない。

他にも「このシーンはそろそろカットをかけてもいいな」と僕が思った瞬間、次のカットに移っている。通常、自己主張の強い監督であるならば、観客の意向など無視して、自分の趣味のカットや、意味のない「長回し」などをしてしまう。本作ではそれが一切無い。しかも編集が見事だ。シーンとシーンの長さ、つながりに全く違和感がない。ただ、ひとつ僕が注文を付けるとすれば、本作がほぼ全編、手持ちカメラで撮影されている事だけだ。ただ、作品があまりにも魅力的であるだけに、手持ちカメラ特有の、ぶれる画面もさほど気にはならない。

さらには、音楽の使い方、そのセンスの良さには驚くばかりだ。

ルディの歌声にも是非注目してほしい。

さて、障害を持つ子供と、ホモ・セクシュアリティの男性二人は、ひとつの家族として認められるのか？

映画の後半、アメリカ映画お得意の法廷場面となる。

僕はこの作品を見ながら、チャップリンの「キッド」を思い出していた。貧しい浮浪者の元で暮らす児童は「適切な処置」が必要。そこでお役人は、チャーリーから子供を取り上げ、孤児院に送ろうとする。それを必死で取り戻すチャーリー。

チャップリンの「キッド」はハッピーエンドで締めくくられるお話である。

本作のマルコもハッピーエンドのお話大好きだ。マルコが夜、寝付くとき、ルディにおとぎ話をせがむ。そしてルディは「ハッピーエンド」のお話を語って聴かせる。そこには子供を思いやる、保護者としての美しさと崇高さがある。

しかし、世間や、一般常識や、法廷と言う場所は「美しさ」や「思いやり」などの人間性を評価する場ではなく「異端者達」を排除する場所であった。

ルディとポールが見守る夕餉の食卓。大好きなチョコレートドーナッツを一口、頬張るマルコ。マルコはにっこり微笑む。

「ありがとう」

ダウン症という障害を持つマルコの微笑み。そのあまりの清らかさ、たとえ障害をもった命であっても、その命に宿された崇高な美しさは、やはりスクリーンで体験すべきだろう。

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 トラヴィス・ファイン
主演 アラン・カミング、ギャレット・ディラハント
製作 2012年 アメリカ
上映時間 97分
予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=uAeb4Ze3fKk>

WOOD JOB! (ウッジョブ) ～神去なあなあ日常～

WOOD JOB! (ウッジョブ) ～神去なあなあ日常～

2014年5月10日鑑賞

負の遺産を抱えた僕たちが思う事

矢口監督作品を観ると、いつも「ああ、そういう手があったか！！」と驚かされる。そして映画の可能性なんて、まだまだあるんだよ、と教えてくれるような気がする。

今回、矢口監督が眼を付けたのはなんと「林業」

はっきりいって「そんなもん、映画になるんかいな？」と誰もが思う。半信半疑で公開初日、劇場で鑑賞した。



結果。

文句なし! おもしろい!! ちゃんと、映画になってる!

だけではない。お恥ずかしながら、最後は感動のあまり、涙腺がユルユルになり涙が流れた。

最初は林業など、全く本気で取り組むつもりなどなかった主人公、勇気(染谷将太)だが、林業研修を進めるうち、少しずつではあるが、「木と向き合う事」になじんでゆく。

矢口監督作品を追っかけている人は本作を観てすぐ察するだろう。「ウォーターボーイズ」や「スウィングガールズ」のあのパターン。

はじめは全くやる気がない主人公。だけど、あるひとつの物事に出会い、「しかたなく」「巻き込まれ」最後には「自ら進んで」それをやり遂げる。人間として成長し、人生のステップをひと

つ上がる。

矢口監督作品は皆、鑑賞した後、とてもすっきりと後味が良い。



僕は、この映画の主人公と全く同じような体験を、現在進行形で継続中だ。友人が、この映画に出て来るような過疎の山村で、「小さな家」を手作りしているのである。僕も”しょうがなく、巻き込まれて、いやいやながら”作業を手伝うハメになった。まるでこれは矢口映画のパターンそのものである。

彼の車に乗って高速道をすっ飛ばし、やがて険しい山間部に入る。道路は木々が覆い被さり、昼なお暗い。たどり着いた先はもう、本作の舞台と同じ、“ど田舎”としか言いようが無かった。電車はおろか、バスも走ってない。コンビニはふた山超したところにしかない。携帯はかろうじて繋がった。しかし、WiFiの電波は届かない。僕のケータイではネットにつなげられなかった。車から降りた僕は、里山と里山が重なり合う、その風景に圧倒された。なにより目の前に広がるのは「直線」が一切存在しない世界なのだ。僕の身体に染み付いた遠近法はまやかしだった。僕の感覚はクラクラし始めた。

都会暮らしは、全て人工的な直線で囲まれた世界だ。中毒のように使っているパソコンも人工的な平面である。この集落で暮らす事は、里山の複雑な曲線が創る、多様な造形のハーモニーの元で暮らす事なのだ。

友人がつぶやく

「ここ、鹿がよう出るんや」

友人が作っている家の、となりのおばちゃんの話では

「山には猿も出るし、熊も出るんやでえ」という。



更には、この映画にもあるが、僕の友人は作業中、マムシにかまれ、一週間入院した。実際に里山に暮らす事は、都会人が思うほど生易しくはない。決して、生半可な気持ちで出来ない。当然向き不向きはあると思う。しかし、僕はこの過疎の山村に何度か通ううち、いろんな発見をした。

作業中、寝泊まりさせてもらう、隣の古民家。そこに薪ストーブがある。

試しに僕は火をつけさせてもらった。都会人の僕は薪に火をつける事が出来なかった。

愕然とした。しかし、大きな発見があった。

木と言うのは貴重な財産だ。燃やせばエネルギーになる。お湯を沸かし、料理をし、部屋を暖めることができる。もちろん、建築の材料となり、食器になり、家具となる。その大切な木が、この集落の山間部では間伐されておらず、倒木が至る所にほったらかしにされているのだ。いわば、エネルギー、財産のカタマリが、そこら中に手つかずのままゴロゴロころがっているのである。そして僕らは海の向こうから、高いお金を払って油を買い求め、それで電気を作り、ケータイやパソコンを使う。僕たちはそれを当たり前だと思って利用している。

ちょっと立ち止まって考えれば、こんなおかしい事は無いのだ。

僕は「この集落をなんとかできないか」とまで考えるようになった。

僕たち都会人は、今再び、里山での暮らし方を再発見しようとしている。

底なしに魅力的な

神去村の住人達



平野勇氣

都会育ちのチャランポランな18歳。大学受験に失敗、彼女にもフラれ、将来に絶望していた時に、緑の研修生を募集するパンフレットの表紙の美女につられて、1年間の林業研修プログラムに参加することに。

SHOTA SOMETANI

染谷将太

石井直紀

緑の研修生のパンフレットの表紙の美女。なぜか勇氣に対して優しく接する。

MASAMI NAGASAWA

長澤まさみ

飯田ヨキ

林業の天才。中村林業のエースであり、1年間勇氣の面倒を見る。同じ人間とは思えないほど、ワイルドで凶暴。

HIDEAKI ITO

伊藤英明

ただ、矢口監督は「この映画で林業の啓蒙をやりたかった訳ではない」と述べている。今回、矢口監督は「林業」という題材、その「リアルな姿」に純粋な興味を持ち、映画の素材として使いたかったのだろう。林業という「テーマ」は矢口監督の腕にかかれば、エンターテインメント映画として成立する事を証明したのだ。

自分の二世代前、おじいちゃん達が育てた木を、平成の現代に”恵み”として有り難くいただくこと。主人公の勇氣は気づいたのだ。林業は木を切り倒す事だけではない。木を植え、育て、そして次の世代ではなく、もっと先の世代にバトンタッチをする事なのだ。

何万年後まで保存しなければならない「負の遺産」をかかえてしまった21世紀、ニッポンの僕たちは、22世紀、いや、もっと先に何を受け渡すことができるのだろうか。それを今考えてみてもいいのではないだろうか？

天見谷行人の独断と偏見による評価（各項目☆5点満点です）

物語 ☆☆☆☆

配役 ☆☆☆☆☆

演出 ☆☆☆☆☆

美術 ☆☆☆☆

音楽 ☆☆☆☆

総合評価 ☆☆☆☆

作品データ

監督 矢口史靖
主演 染谷将太、長澤まさみ、伊藤英明
製作 2014年
上映時間 116分
予告編映像はこちら

<https://www.youtube.com/watch?v=czloufvB8U>

映画に宛てたラブレター2014・6月号

<http://p.booklog.jp/book/85620>

著者：天見谷行人

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/mussesow/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/85620>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/85620>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ